

終のすみか 支え求め

09 総選挙
四国のあした ③

過疎の村

山の斜面にへばりついたような集落を見上げると、民家の庭先に赤い旗が立っているのが見えた。独り暮らしの高齢者が、今日も生きていくことを周りに知らせる目印だ。

徳島県の旧東祖谷山村(現三好市東祖谷)。全世帯の3割にあたる268世帯が、高齢者の独り暮らし世帯だ。2年前から旗を立て始め、約45世帯が利用している。

赤い旗に見守られ

「こんな旗でも、みんな見とるんでよ」。6年前から1人で暮らす喜多マス子さん(76)は言う。物干しやおの先で揺れる旗は、日に



①道路から見やすい場所に赤い旗を立てている喜多マス子さん(右) 徳島県三好市東祖谷の谷釣井 岡林早美さん(左) 宅を訪れた大豊町の地域担当・森一芳さん。岡林さんの顔に笑みが浮かんだ。高知県大豊町戸手野

焼けて色が薄くなっている。一度、外に出し忘れたことがあった。「何かあったか?」。その日の昼、近所のお年寄りが様子を見に来てくれた。

本当に病気で倒れたらどうしよう。それが一番の心配だ。でも、誰かが旗を見守ってくれているという安心感が、支えになっている。

旗を立てる活動を始めたのは、千葉県の郵便局を辞めて93年にUターンした市岡日出夫さん(61)。映画「幸福の黄色いハンカチ」(77年)がヒントだった。

旧村の人口は57年の8千人をピークに、20年間で半減。高校進学

と同時に村を出た市岡さんが、およそ30年ぶりに村へ帰ると、田畑は荒れ放題。町村合併で村役場は支所になり職員も減った。仕事はなく、農業だけでは暮らせない。

「自分たちで過疎を止めることは無理。だけど、ここで生きてきた人が支え合い、ここで最期を迎えられる地域にしたい」

国は過疎法に基づき、福祉の向上、雇用の増大、過疎地域の自立を目標に掲げ、道路や観光・福祉施設などの建設を進めてきた。だが、人の流出は止まらない。

総務省の過疎問題懇談会は08年、過疎地の現状をまとめた。それによれば、相互扶助機能の喪失、身近な「足」の不足、耕作放棄

地の増加と、住民の安全・安心にかかわる問題が深刻化している。

相談専門員を配置

高知県大豊町には、お年寄りたちの相談相手を専門にする町職員がいる。

「おるかよ?」

住民課の地域担当、森一芳さん(50)は、訪ねた高齢者宅の玄関先で声をかけた。

笑顔で出迎えたのは岡林早美さん(91)。「おるかよ」って来てくれる人は誰もいないから、うれしい。娘からの電話より、森さんの訪問の方が多い。

■ 四国4県の過疎地域指定市町村の数

過疎地域指定市町村	全市の町村数
徳島県	13 / 24
香川県	6 / 17
愛媛県	17 / 20
高知県	27 / 34
合計	63 / 95

※09年4月1日現在。過疎地域指定市町村は過疎地域自立促進特別措置法に定めた要件に当てはまる市町村。市町村合併にともない、新たに過疎地域とみなされた「みなし過疎」や、旧市町村のみを過疎地域とみなす「一部過疎」も含む。

町の高齢化率は53%。かつて、過疎対策として定住促進や都市との交流をと、町はキャンプやイベントを続けた。それでも年に150人ずつ人口が減った。

こんな対策でいいのだろうか。森さんは疑問を感じてきた。「高齢化率がどんなに高くなっても、地域の人たちが健康で生き生きと暮らせればいいと思うんです。この町で頑張ってきたお年寄りのためにお金を使った方がいい」

町が地域担当を設けて4年。夜でも携帯電話が鳴るようになった。森さんは、仕事の意義を実感している。